

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320063

研究課題名(和文)現代アイルランド演劇の総合的研究と国際的研究拠点の拡充

研究課題名(英文)Comprehensive Studies of Contemporary Irish Theatre and Development of the International Research Centre

研究代表者

岡室 美奈子 (OKAMURO, Minako)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：10221847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は サミュエル・ベケットのメディア論的研究と 現代アイルランド演劇におけるサウンドスケープの研究を両輪とした。では、岡室がイエイツとジョイスがベケット作品に与えた影響を視聴覚メディアの視点から明らかにした。では、三神がトム・マーフィーの『ハウス』がアイルランド史を意識した自作の総括であることを示すなど、作品分析を通して歴史やナショナル・アイデンティティの問題に切り込んだ。八木はベケットのラジオ作品におけるメディア上の変化(台本から録音へ)を作品の「時間化」と「空間化」として捉え直した。3冊の論集刊行(内1冊は海外)とベケット展の開催、海外派遣やセミナーによる若手育成を行なった。

研究成果の概要(英文)：We have taken a new look at the works of Samuel Beckett and contemporary Irish theatre. Okamuro has investigated how Beckett's sense of media developed through occultism. Her findings point to the ways in which Yeats and Joyce through their works influenced Beckett's grasp of vision and sound. Yagi has also examined plays by Beckett, focusing on his pieces for radio. Her analysis of play-texts and recorded productions shows Beckett's versatility in laying out time and space. Utilizing her knowledge of Irish social and political history, Mikami has addressed the question of national identity in Irish drama. One of her papers discussing The House by Tom Murphy also deals with the problem of sound. Our research has resulted in the publications of three monographs, including one published in Dublin, a museum exhibition featuring Beckett, and emerging academics under our supervision having gained experience through international as well as domestic conference and seminar presentations.

研究分野：人文学

 キーワード：アイルランド 演劇 サミュエル・ベケット サウンドスケープ トム・マーフィー イェイツ ラジオ
 劇 共生

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題は、平成 15 年度に採択された科学研究費補助金基盤研究 B「アイルランド演劇の総合的研究とアイルランド演劇アーカイブズの構築」(15320040、平成 15 年度～17 年度)、同じく基盤研究 B「現代アイルランド演劇の総合的研究と研究拠点の形成」(18320052、平成 18 年度～19 年度)、同じく基盤研究 B「現代アイルランド演劇の総合的研究と国際的研究拠点の確立」(20320047、平成 20 年度～22 年度)を継承し、国際的研究拠点としてさらに拡充・発展させるものである。

アイルランド演劇は世界的に注目度が高いが、日本のアイルランド演劇研究は研究者の層が厚いとは言いがたい。そのような状況のもとで本研究課題の代表者・分担者は、過去 3 期にわたる基盤研究(B)において、国際的な研究拠点の構築と国際学会での研究発表や海外での出版、海外の研究者との交流、若手研究者の育成などに積極的に取り組んできた。本研究課題は、それらを継承しつつ研究者の組織化によって日本のアイルランド演劇研究全体の水準の向上に寄与し、それを世界に向けて発信することを目指したところに、最大の意義がある。特に若手研究者の育成に力を注ぎ、国際的な学会参加や国際的な学術誌への投稿を促進することとした。

(2) 本研究は、サミュエル・ベケットのメディア論的研究と現代アイルランド演劇におけるサウンドスケープの研究を両輪とする。

ベケット作品におけるメディア・テクノロジーとオカルティズムの結びつきは、本研究代表者が開拓してきた研究分野であるが、現在、世界的に重要性が認識されつつある。本研究は、それをさらに発展させ、その学術的意義をより明確にするものである。

また、アイルランドでは口承文化を背景とする語りの伝統とともに、独特な音楽の伝統が演劇に重要な影響を与えているが、現代アイルランド演劇の音、音楽、ソングの問題を総合的に扱った先行研究、論文集は例がない。本研究は、アイルランド演劇研究に新たな視座を提起するものである。

2. 研究の目的

(1) サミュエル・ベケットのメディア論的研究

研究代表者の岡室美奈子は、大学院生およびポストから若手研究者を研究協力者として、ベケットのメディア論的研究を推進することを目的とした。ベケットは、演劇、テレビ、映画、ラジオ、小説など多様なメディアのための作品を書き、各メディアの固有性を追求した。本研究は、これまで特定のメディア・ジャンルについて行われてきた先行研究の成果を踏まえ、個別の作品分析に加えてジャンル横断的な考察を行なうことにより、メディア・ジャンル間の相互影響関係を明らか

にするものである。特に岡室は、メディア・テクノロジーとオカルティズムに関する研究を発展させ、その重要性を国内外に発信することを目的とした。

さらに、申請時には記載していなかったが、採択年に起こった東日本大震災後にベケット作品が重要な意味を持ったことに着目し、「共生」という視点からその意味を考察し、展示という手法によって成果を広く社会に還元し、芸術の社会的意義を問うことが目的として付加された。

また、外部にも開かれた若手研究者のベケット・セミナーを定期的開催し、成果を論集として出版し、日本のベケット研究の活性化に寄与することを目指した。

(2) 現代アイルランド演劇におけるサウンドスケープの研究

研究分担者である三神弘子、八木斉子が中心となり運営してきた現代アイルランド演劇研究会では、共通テーマとして、現代アイルランド演劇をとりまく〈音〉の問題を取り上げ、研究の推進を図った。

三神はマーフィー、マクギネス、キルロイといった現代アイルランド演劇を担う劇作家の作品をとりあげ、〈音〉のテーマを意識しつつ、アイルランド近現代史におけるナショナル・アイデンティティの問題とそれぞれの作品がどのように有機的に関わり合っているかに照準を合わせた。

八木は、ベケットのラジオ劇作品を台本と録音の双方を突き合わせながら綿密に分析することにより、別々に検討しただけでは特定しがたいベケットの言語性・メタ言語性を明らかにすることを目的とした。

また、本研究の成果を論集としてダブリンで刊行し、成果を国際的に発信することを目指した。

3. 研究の方法

(1) サミュエル・ベケットのメディア論的研究

研究代表者の岡室は、ベケットの演劇・テレビ作品をヨーロッパのモダニズムの文脈の中に布置し、視聴覚テクノロジーや神秘思想との関連をメディア論的視点から分析することとした。ベケットは同郷のウィリアム・バトラー・イェイツやジェームズ・ジョイスの影響を受けているが、三者ともヨーロッパのモダニズムへの志向性を持っていた作家であり、彼らに共通するオカルティズムへの関心も、モダニズムにおけるオカルト・リヴァイヴァルの隆盛と切り離すことはできない。モダニストたちが近代の視聴覚テクノロジーに深い関心を示していたことはよく知られている。本研究課題では、オカルティズムと、それと深く関わる近代の視聴覚テクノロジーとを、作家たちが自己の無意識など、理性では把握できぬ「他者」に出会う手段と位置づけ、ベケットのテレビや演劇作品をその現代的展開ととらえて考察し、その視

点からモダニズムの作家たちからの影響を明らかにするという方法をとった。

また、展示により、研究成果を社会に広く還元するという新しい方法を導入することとした。その際、災害や戦争時にベケット作品が、ひいては芸術が果たしうる役割に焦点を当てた。

若手研究者と毎年集中的にベケット・セミナーを行ない、日本のベケット研究の水準向上を図ることを心がけた。また、オカルティズムの文脈で捉えられるベケットの後期テレビ作品に舞踊譜を専門家の協力を得てデジタル化し、学生を使って再現するなど、新たな研究方法も導入した。

(2) 現代アイルランド演劇におけるサウンドスケープの研究

三神は、マーフィー、マクギネス、キルロイらによる劇作品の詳細なテキスト分析を行うと同時に、それらの録音・録画資料にもあたり、テキストとの詳細な比較をおこなった。(マーフィーの作品に関しては、アイルランド国立劇場のアビー・シアターのアーカイブ、キルロイの作品に関しては、大英図書館所蔵録音資料を検討、分析した。)

八木は、ベケットのラジオ劇作品について台本分析をおこない、先行文献と関連付け、大英図書館所蔵の録音資料を詳細に分析した。また、ベケット作品との繋がりをしばしば指摘されるハロルド・ピンター作品との比較を適宜おこない、より広い視野からもベケット作品を捉えた。

(3) 国内外での研究活動

国内では、研究代表者・分担者・研究協力者を中心に外部に開かれた研究プロジェクトを組織し、研究会やセミナーを開催することとした。また、国外での研究活動にも力を入れ、国際的な学术交流、海外のアーカイブ資料の調査・収集、また、研究代表者・分担者のみならず研究協力者である若手研究者の国際学会での成果発表や国際的学術誌や論集への投稿を促進した。さらに、国内外における論集の刊行や国際学会での研究発表によって、成果を積極的に発信することとした。

4. 研究成果

(1) サミュエル・ベケットのメディア論的研究

本研究の大きな成果として、2冊の論集刊行がある。『サミュエル・ベケット! ——これからの批評』と『ベケットを見る八つの方法——批評のボーダレス』(ともに水声社)がある。とりわけ前者は、若手研究者を全国から集めたベケット・セミナーの成果として位置づけられ、若手研究者の育成を目指した本研究課題の大きな成果と言える。論集刊行後も、春休休暇中に集中的にベケット・ゼミを開催したほか、若手研究者を国際学会や英国レディング大学に拠点を置くベケット・アーカイブを中心に海外での草稿調査に派遣す

るなど、積極的に人材育成を行なった。

具体的な研究成果としては、岡室は、ベケットのテレビ作品『...雲のように...』におけるイェイツの影響を、ファンタスマゴリアなどモダニズム期のプロジェクション・メディアとテレビという現代的メディア、そして心霊主義の関わりという視点から詳細な作品分析を行い、明らかにした。また、ベケットの演劇作品『オハイオ即興劇』におけるジョイスの影響をグラモフォンという聴覚メディアと降霊術の視点から作品分析を行い、明らかにした。どちらも、モダニズムの作家たちにおけるメディア・テクノロジーと心霊主義や降霊術などオカルティズムの結びつきをベケットが継承しつつ、テレビドラマ等現代の表現形式に発展させたことを明らかにするものである。ベケットの関心は、作家の理性や意識にコントロールされない言語をいかに汲み上げるかにあり、こうしたメディア・テクノロジーによる機械性と霊媒現象の結合は、「他者」としての言語に道を拓くものである。こうした視点はこれまでのベケット研究において欠落していたが、2012年にケンブリッジ大学から刊行されたベケットの教科書とも言える *Samuel Beckett in Context* に岡室の『The Occult』が収録され、岡室が開拓してきた研究がベケット研究の一領域として公的に認知されたことを示した。

また、2014年には若手研究者たちとの共同研究の成果として、早稲田大学演劇博物館において、「サミュエル・ベケット展—ドアはわからないくらいに開いている」を開催し、災害や戦争時におけるベケット作品をはじめとする芸術の意味を「共生」という視点から問い直し、展示という新たな手法で研究成果の社会への還元を行った。同展には2万人以上が来場し、社会的に大きな反響があった。同時に『サミュエル・ベケット—ドアはわからないくらいに開いている』(早稲田大学演劇博物館)を刊行したが、これは単なる展覧会図録ではなく論集として編まれたものであり、若手研究者たちにも執筆の機会を提供した。

(2) 現代アイルランド演劇におけるサウンドスケープの研究

本研究の最大の成果は、2015年に、論集 *Irish Theatre and Its Soundscapes* をダブリンの Glasnevin Publishing より刊行したことである。

研究内容については、三神はまず、マクギネスの『ドリー・ウェストのキッチン』、キルロイの『ダブル・クロス』をとりあげた。アイルランドで「非常事態」と称される第2次世界大戦を背景に、ナショナル・アイデンティティの問題、アイルランドと英国との関係性がどのように提示されているか、分析・検討をおこなった。また同時に、それぞれの作品は、執筆された当時の現代アイルランドに対する注解としてみるができることを論じた。

続いて、マーフィーの『ハウス』に見られ

る無音のグラモフォンが示す心象風景について検討を加えた。1902年に発表された、イェイツ・グレゴリーによる共作『キャスリーン・ニ・フーリハン』の中で、老婆に身をやつしたキャスリーンがアイルランドを<家>になぞらえるところから、アイルランド演劇がスタートしたとするならば、20世紀最後の年、2000年に、マーフィーが<ハウス=家>というタイトルの作品を発表したことの意味は大きい。マーフィーは、1950年代という20世紀の中間点に舞台を設定した『ハウス』という作品において、近現代アイルランド史、アイルランド演劇史を意識しながら、自身の作品を総括しているのである。作中の無音のグラモフォンのイメージを切り口に、過去の作品、『パトリオット・ゲーム』、『ジリ・コンサート』、『論理には遅すぎる』、『パリアガンガーラ』、『ブリジット』などとの関連を分析することで、マーフィーの全体像が明らかになった。

八木は、3年間を用いてベケットのラジオ劇作品である『言葉と音楽』、『残り火』、『カスカンド』を独立に分析し、最終年度の4年目には作品群を横割りして俯瞰した。

『言葉と音楽』については、「登場人物」である「音楽」がベケットによる台本では自然言語として表現される点に着目したうえで、分析した3種類の録音それぞれにおいては「音楽」がオーケストラ曲の断片であることから「言葉」との区別があたかも明快であるかのようだが、実際には、両者の関係が曲ごとと役者ごとに大きく異なるものであること、つまり、ベケットが台本で問い直した言葉と音楽との境界線は作品が音波に移行する段階で個々の制作者・作曲家・役者によって更に問い直されるものであることを明らかにした。

一方、複数の音響空間が噛み合う『残り火』については、音の発生源と音との間に必ずしも関係を見出す必要はないとする現代哲学者の主張を参考としながら、『残り火』という「ものがたり」の進行・次元・時系列を直接に左右するものが言語音・非言語音の音響的側面であることを示した。

『カスカンド』については、ベケットによる台本の約半分を占める点線に着目し、ピンターやユージン・オニールの演劇作品に出てくる点線との違いを指摘したうえで、分析した3種類の録音それぞれが点線をどのように解釈し処理しているかを明らかにし、ベケットの言語には表現し難いものと表現の厳密さとが同居していることをあらためて指摘した。

総括的には、ベケットのラジオ劇作品群におけるメディア上の変化(台本から録音へ)を大きく作品の「時間化」と「空間化」として捉え直し、それぞれの録音が有する特異性がベケットの言語性・メタ言語性の反映であると結論づけた。そして、言語音・非言語音の極めて微妙な響きの具合が作品解釈を大

きく左右するという事実に我々がもっと注意を払うべきであること、つまり、ラジオという一過性のメディアと再生可能な録音との関係を考察するのみならず、録音方法、記録媒体、録音の焼き直し、再生装置の変化といった要素の検討が今後は求められるであろうと指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

三神弘子、Gramophone in *The House*: Tom Murphy's Metaphor Behind Its Soundlessness, in *Irish Theatre and Its Soundscapes*. 査読無、Dublin: Glasnevin Publishing, 2015、pp. 72-92.

八木斉子、From Beckett to the Engineered Sound: *Words and Music, Cascando*, and Other Plays for Radio、演劇研究、査読有、Vol. 38、2015、pp. 83-94.

岡室美奈子、瓦礫の上で待ちながら——ベケットと共生の思想、『文学』第15巻第2号、査読無、岩波書店、2014年、pp.2-15.

岡室美奈子、コナン・ドイルの心霊主義と探偵小説 不完全なメディア/メディウム、『ユリイカ 総特集シャーロック・ホームズ』2014年8月増刊号、査読無、青土社、pp.172-180.

三神弘子、『ハウス』(2000)におけるグラモフォン：その無音性がものがたるもの、『演劇研究』、査読無、vol. 37、2014、pp.1-19.

八木斉子、Dots in *Cascando*: Beckett on the Page and Beyond、英文学、査読有、Vol. 100、2014、pp. 83-94

Minako Okamuro、"The Occult", *Beckett in Context*, ed. Anthony Uhlmann, Cambridge University Press、査読無、2012、pp.337-347.

岡室美奈子、自動降霊機械としてのテレビ——ベケット『……雲のように……』における霊媒/媒体をめぐる、『ベケットを見る八つの方法—批評のボーダレス』、水声社、査読無、2013、pp.337 - 361.

八木斉子、The Listener as a Mediator in Beckett's *Embers*、演劇研究、査読有、Vol. 36、2013、pp. 93-103

岡室美奈子、霊媒ベケット——蓄音機としての『オハイオ即興劇』と『ユリシーズ』、『サミュエル・ベケット！—これからの批評』、水声社、査読無、2012、pp.291-320.

三神弘子、Looking back at the time of the Emergency: Kilroy's *Double Cross* (1986) and McGuinness's *Dolly West's Kitchen* (1999)、*Journal of Irish Studies*、査読有、Vol. XXVII、2012、pp.19-27.

八木斉子、'A Truly Individual Verbal Expression': Samuel Beckett and a Radio Play、研究年報(日本エドワード・サピア協会)、査読有、Vol. 26、2012、pp. 31-43

八木斉子、Continental Cities and Sound: Pinter in Three Films、演劇映像学 2011、査読無、Vol. 5、2012、pp. 175-197

〔学会発表〕(計2件)

岡室美奈子(招待講演)、“Beckett in Japan”、「(不)可視の監獄——サミュエル・ベケットの演劇と現代世界」展、ローマ市立演劇記念館、2013年12月7日。

三神弘子、Looking Back at the Time of the Emergency: Kilroy's *Double Cross* (1986) and McGuinness's *Dolly West's Kitchen* (1999)、国際アイルランド文学会日本支部年次大会、於同志社大学、2011.10.9.

〔図書〕(計5件)

三神弘子、八木斉子編著、*Glasnevin Publishing, Irish Theatre and Its Soundscapes*、2015、155

岡室美奈子(監修・編著) サミュエル・ベケット——ドアはわからないくらいに開いている、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2014年。

岡室美奈子、川島健編著、ベケットを見る八つの方法—批評のボーダレス、水声社、2013年。

岡室美奈子、長島確、川島健編著、サミュエル・ベケット!—これからの批評、水声社、2012年。

岡室美奈子、梅山いつき、60年代演劇再考、水声社、2012年。

〔その他〕

展覧会監修 岡室美奈子 『サミュエル・ベケット展——ドアはわからないくらいに開いている』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2014年4月22日—8月3日。

<http://www.waseda.jp/enpaku/ex/13/>

講演 岡室美奈子、サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』の世界、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館双柿会研修会、早稲田大学6号館318教室、2014年7月19日。

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡室美奈子 (OKAMURO, Minako)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：10221847

(2)研究分担者

三神 弘子 (MIKAMI, Hiroko)
早稲田大学・国際学術院・教授
研究者番号：20181860

(3)研究分担者

八木 斉子 (YAGI, Naoko)
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：10339666